

学生による授業づくり

— 2005年度「教育原論Ⅱ」の授業構成 —

鈴木そよ子

はじめに

「教育原論Ⅱ」は、教育職員免許法の科目区分では「教育の基礎理論に関する科目」に該当する科目であり、「教育に関する社会的、制度的または経営的事項」を主な内容とする。本学での配当期は1年次前期に「教育原論Ⅰ」、後期に「教育原論Ⅱ」となっている。

これまで筆者が担当してきた「教育原論Ⅱ」では、教育職員免許法の基本的位置づけを踏まえつつ、学生が参加できる授業づくりを重ねてきた。授業づくりに参加することによって、単に知識を吸収することに止まらず、自分の適性を自覚し、授業をする側から授業をみる視点を持つきっかけになり、授業の工夫を自覚的に吸収する意識を持つきっかけになり、教育実習に向けて行なうべき準備について考えるきっかけにもなることを期待して取り組んできた。

本年度は「教育原論Ⅰ」「教育原論Ⅱ」ともに同一テキストを指定しており、「教育原論Ⅰ」で使用しなかった4～8章を「教育原論Ⅱ」で扱うことにした。受講者が5グループに分かれて章ごとに担当して授業を行った。この授業方法は筆者にとっても初めての試みだった。学生たちは一斉授業とは異なる意欲的な取り組みをして自分たちの授業を作り上げた。企画した筆者自身の予想を超えた授業展開もあり、筆者自身も授業者として参考になる点が多かった。この授業の記録ノートが手元にあり、筆者の記憶が鮮明な現時点で「教育原論Ⅱ」のまとめを文章で残すことが、授業づくりに取り組んだ学生に対

する授業運営者としての責務だと考えた。

本論文では、まず、授業初期の段階で筆者が学生に示した「教育原論Ⅱ」の骨組みと、裏方の作業として筆者が行なった下準備の内容を簡潔に示した上で、次に、学生による授業の展開とポイントを整理し、最後に、彼らの授業から得た、新たな授業づくりのアイデアをまとめる。

1 「教育原論Ⅰ」の授業方法と学生の傾向

例年、「教育原論Ⅰ」では講義中心の授業を行い、定期試験を実施している。2005年度の「教育原論Ⅰ」は2・3年次生と1年次生が2:3の割合になった。「教育原論Ⅰ」は3コマ開講しており、受講者数約280名。どのクラスでもテキストに即して一斉授業を行いながら、学生の傾向をつかむことに配慮した。講義の流れを辿ると、第1回から第13回まで、パワーポイントを用いてテキストのポイントを整理しながら説明していった。

学生の参加方法として、テキストを読む、教員の問いに対する応えを発言するという方法をとった。また、授業の最後には、教員が授業内容に関わる質問を出し、学生はB6の用紙に自分の意見や感想、解答などを書いたものを提出した。毎回、授業終了時点で次回の予告をし、予習するテキストの範囲を示した。このような授業の繰り返しの中で、本年度の学生の傾向がととても積極的で、表現することを苦にしない傾向があると感じた。

「教育原論Ⅱ」のメンバー構成は、今年度「教育原論Ⅰ」を履修した2・3年次生の多くがすでに「教育原論Ⅱ」の単位を修得しているため、1年次生がメインとなるという変化はあるが、人数は適度な規模となるため、グループで活動できる授業方法をぜひ企画したいと考えた。そして、学生と相談しながら実施したのが、グループごとに各章の授業を担当するというものだった。

2 クラス数・時間帯・受講者人数・講堂

「教育原論Ⅱ」は、90分授業が3コマあり、経営学部と理学部の学生が受講者となっている。それぞれのクラスの人数は以下のような構成になった。

- ・月曜日 5限-42名（うち1年次生37名）
- ・火曜日 2限-33名（うち1年次生23名）
- ・金曜日 4限-45名（うち1年次生41名）

教室はいずれもパワーポイント、教材提示器、ビデオの使用可能な教室で、机は3人または4人座りの作り付けの長机である。

3 テキスト

松浦良充編著『いま教育を考えるための8章 現代教育の基礎理論〔改訂版〕』（改訂版5版）川島書店、2004年を使用した。

本書は現代教育の基礎理論全般について取り扱っており、わかりやすく表現されているので、1年次生用のテキストとして選んだ。

ただし、データや説明文のなかには、情報として古くなっているものもあり、随時現在の制度について説明し、データを補充しながら使用した。

「教育原論Ⅱ」で扱った4章から8章の表題を以下に挙げる。

-
- 4章 教えながら、学びながら、共に生きながら（教育方法・授業）

- 5章 「掃除」や「給食」から学校教育をみつめ直す（教科外教育活動・生活指導・特別活動）
- 6章 社会のなかの学校（教育制度・教育行政・教育政策）
- 7章 学級を経営する・学校を運営する（学級経営・学校運営）
- 8章 教育を問う（教育哲学・教育の本質）
-

4 「教育原論Ⅱ」の全体的な展開

「教育原論Ⅱ」の授業全13回を次のように構成した。

- ・第1回：授業ガイダンス
 - ・第2回：担当章決め、顔合わせ、章順番決め
 - ・第3回：打ち合わせ、基本的な進め方決定
 - ・第4回～第13回：グループごとの授業
- 次に第1回から第3回までの概要を述べることによって、この授業の骨格を説明する。3クラスとも、第1～3回は同様に進めた。

4-1 第1回：授業ガイダンス

教員が授業に持参したもの

- ・1名記入用の出席カード
- ・テキスト
- ・パソコン

学生が3コマのうちどの授業に出るのかは次回確定するが、今回の出席カードでおよその人数と学生名を把握し、この段階でクラスごとの一覧表を作成できる。

授業の展開

資料1「第1回授業スライド1～5」にあるパワーポイントの6スライドを用意して、「教育原論Ⅱ」の授業の進め方の概要について説明した。各クラスとも受講者の合意を得て、次回の内容に進むことになった。

資料1・第1回授業スライド1～5

1. 教員免許取得について
- ・自分自身が教員になることを希望する者を

対象としている。

⇒採用試験を受ける。

- ・企業の就職活動で、履歴書に「教員免許取得見込み」とは書けない。(就職課の指導)

2. 教育原論Ⅱについて

- (1) 教育原論Ⅰの登録曜日・時限とは関係なく
・月曜 5 限 ・火曜 2 限 ・金曜 4 限のいずれかで登録する。
- (2) 来週から登録曜日・時限の授業に出席する。
- (3) 今年度 1 年生：「教育原論Ⅰ」「教育原論Ⅱ」「教育心理学」の合格者は、来年度「教科教育法Ⅰ」を履修できる。

3. 教育原論Ⅱの授業方法 (1)

- ・テキスト
松浦良充他
『いま教育を考えるための 8 章』
川島書店, 2200 円+税
- ・教材とする章
4 章～8 章 (pp.69-170)

3. 教育原論Ⅱの授業方法 (2)

- ・授業回数：13 回
- ・第 1 回：授業ガイダンス
- ・第 2 回：担当章決め・顔合わせ・順番決め
- ・第 4～13 回：グループごとの授業
- ・定期試験：授業曜日・時限別
- ・評価：平常点 50 点+定期試験 50 点
(原則として担当日に欠席したら単位はない)

4. 担当する章の進め方

- ・担当者グループが「教師」を担当する。
- ・担当者以外の受講者が「生徒」を担当する。
- ・授業の進め方は一斉授業に限らず、グループ学習や、課題調査報告等を取り入れる。
- ・予習や宿題を出すことができる。
- ・2 回の授業を 1 セットとして「生徒」の評価と「教師」の評価ができるように構成する。
- ・担当する 1 章全体を扱わなくてもよい。

5. 次回までの課題

- ・登録する曜日・時限を決める。

- ・テキストの 4～8 章を読み、自分が担当したい章の候補を決める。
- ・授業内容の提案を 1 つ以上見つける。

4-2 第 2 回：担当章決め、顔合わせ、章順番決め

教員が授業に持参したもの

- ・グループごとの話し合いを記録できる B5 用紙 1 グループ 1 枚 (メンバー・リーダー・サブリーダー、中心的な内容、担当日の項目に分かれている。)
- ・パソコン

授業の展開

第 2 回の作業内容 5 点を資料 2「第 2 回授業スライド」に示すようにパワーポイントで用意し、最初に説明し、受講者が見通しをもって参加できるようにした。

資料 2・第 2 回授業スライド

担当章決め・顔合わせ・順番決め

1. 希望の担当章に名前を板書する。
(人数調整)
2. 各章ごとのグループで、自己紹介をする。
3. グループごとのリーダー・サブリーダーを決める。
4. リーダーが集まって、担当の順番を決める。
5. グループごとに担当章のなかで、中心に取り上げることを決めて、発表する。

まず 4～8 章の章名を板書し、学生が担当希望の章のところに自分の名前を書く。全員が書き終わってから人数を確認し、その後人数調整のために移動できる学生を募る。この作業を経て、各章の担当者数がほぼ均等になった。

次に、教室の中でグループごとに分かれて集まり、自己紹介をし、リーダー・サブリーダーを決めるように指示する。この時、担当順番を決めるためにリーダーが集まる時刻を伝える。

予定の時刻になり、各グループのリーダーた

ちが教室の前に出て自己紹介をし、グループのリーダー同士の話し合いや抽選等によって、担当順番を次のように決めた。

金曜 4 限クラス

5 章-6 章-8 章-7 章-4 章

月曜 5 限クラス

5 章-8 章-6 章-7 章-4 章

火曜 2 限クラス

4 章-7 章-6 章-8 章-5 章

この順番を受けて、グループごとに担当章の進め方や取り扱う主な内容について各メンバーの案にもとづきながら話し合う。筆者は各グループを回り質問を受け、アドバイスをする。この時間は授業終了 15 分前までとする。

最後の 15 分で、グループごとの基本的な進め方と、取り上げる内容について各リーダーが全員の前で発表した。グループごとに用紙を提出した。

4-3 第 3 回：打ち合わせ、基本的な進め方決定

教員が授業に持参したもの

・ 座席表。

グループごとに 2 列（長机の両端に 2 人）になるように席を配置し、ふりがなつきの氏名を学籍番号順に記入した座席表を全員に配付した。10 列必要だが、教室によっては 8 列しかない。この教室用にはまず 10 列分の座席表を作り、担当グループのところを折りたたむように「山」「谷」印と破線を入れた。授業の担当者は教壇のところか後部座席にすることにしよう。こうすると生徒グループはいつも最前列から並ぶことになる。

座席表があると、各グループが授業を行なう時、発表者の氏名をスムーズに呼ぶことができるし、出席確認の時間をとる必要もない。学生同士も氏名がわかり、打ち解けやすいという効果もある。

・ 学籍番号順の授業参加者の学科・氏名の一覧表とグループ別の一覧表。

それぞれの表には 3 欄の空欄を加えて、授業中のチェックや成績をつけるときの作業にも使えるようにした。これを両面コピーにして全員に配付した。やはり氏名にはふりがなをつけた。学籍番号・学年は記していない。

・ 連名用の出席票。

ひとり 1 枚配付。毎回 1 グループごとにまとめたものを渡して、ひとりが 1 枚に書き込む。学科・学籍番号・氏名・日付。毎回書き込むことにより、出席の履歴となる。教員は、毎回日付の横の余白部分に印鑑を押す。

・ パソコン

・ 話し合いの内容を書き込む B5 用紙 1 グループ 1 枚

授業の展開

まず、資料 3「第 3 回授業スライド」で示すようにパワーポイントを用いて、今回のポイントを説明した。

その際、教員が強調したことは、各グループは「発表」ではなく、あくまで「授業」を担当すること、各章の内容をベースにしなが、「生徒」担当の学生とのコミュニケーションがとれる内容構成にすること、章の全体を取り扱う必要はないこと、自分たちの実感や体験と重ね合わせて内容をしぼることである。

また、授業の準備は明日からの空き時間や昼休みを使って相談や資料収集をすることになる、その打ち合わせもしておくようにということも念を押した。

資料 3・第 3 回授業スライド

グループごとの作業と報告

- ・ 出席確認
- ・ 2 回の授業で中心に取り上げたい内容を選ぶ。
- ・ 2 回の授業の進め方を決める。

（授業では、生徒のグループ発表、体験報告意見交換、調査報告等を加えて、工夫する）

- ・ 授業の進行や作業の担当を決める。

- ・(全員に配付する資料がある場合は、1週間前に提出)

スライドに即した説明の後、グループごとで話し合い、授業の進め方を決定し、準備の分担を決め、まとめた用紙を授業終了時に提出した。

成績評価方法

100点満点のうち、50点を平常点とし、50点を定期試験の点数とすることは第1回の授業で提示しており、今回は平常点50点の評価方法を決定した。

各クラスで学生と話し合った結果、3クラスとも同じ方法で評価することになった。

5グループが担当するので、2回の授業を1組として10点。自分たちが授業を担当するときは10点とし(ただし、全員で協力して10点に値する準備をすることを約束した)、他の4グループ分は授業担当者たちの評価によって点数が決まる。

1グループで担当する2回の授業は、1回ごとに5点を配分してもよいし、2回目に10点としてもよい。また、評価方法は、授業への参加態度や発言によって評価する、あるいは小テストを行なう、文章で書いてもらうなど、担当グループの授業運営に即した形で決める。そして、評価方法については、担当の第1回の最初に「生徒」に伝えることを全員で確認した。

定期試験の50点については、授業内容にもとづいて教員が作成するというを確認した。

1回の授業で使用する資料

A3両面1枚に限定し、この範囲でいくつ資料を使ってもよいことにした。これには、授業で使用する資料を厳選することと資源の節約という二つの目的がある。資料の原版は1週間前の授業で教員に提出することにした。

小テストを行なう場合の用紙はA3両面1枚の限定とは別にした。さらに教職課程で使用している罫線入りB6用紙は随時使用できるようにした。(次回から授業が始まるが、第1回担当のグループについては、別途資料の原本提出期

日を決めた。)

出欠

この点についても再度確認する。授業が単なる講義ではなく、参加者が協力してつくり上げる性格の内容構成であるため、無断欠席や遅刻は認めない。体調の悪いとき、事情があるときは必ずグループのメンバーに連絡して、教員に伝わるようにすること。この確認にもとづいて、連絡を受けない欠席・遅刻のあった場合は、教員が次回の授業の前後に本人と話し、理由が明確な場合には理由書を提出し、継続対象となるかどうかを判断した。

出席確認については、毎回一人ずつ出席票を提出すると同時に、授業開始時点で教員が全体を見て、座席表とあわせて出欠の確認を行ない、二つの情報をあわせて出席確認としたことを付記する。

次回についてのアナウンス

授業の最後に次回の授業担当グループからのアナウンスがあり、予習すべき点を「生徒」に伝えて終了した。

5 第4回～第13回:グループごとの授業

3クラスそれぞれの授業を展開するが、共通する内容をここで述べる。

1回の授業は60分から80分の授業となった。授業の前後に教員と担当で打ち合わせ、次回の準備について確認した。授業中、教員は授業が終わるまで学生の一人として参加し、授業の展開、板書、パワーポイント、発言、プリントへの書き込みの内容等を詳細にメモした。これらの授業内容が定期試験の内容となる。

授業後、授業を受けた「生徒」たちが授業についてコメントをしたり、授業担当者が感想を述べたり、次のグループへのアドバイスをする時間を設けた。ここで教員からのコメントや追加説明も加えた。内容訂正が必要な場合もここで述べたが、どのグループもよく下調べをしており、内容的な訂正はほとんど必要なかった。

教員は、1 章分が終わった段階で成績を清書するための表（学生に渡した表と同じもの）をリーダーに渡し、リーダーは成績を記入したものとその元になった資料を次回提出した。

授業担当グループの活動

どのグループも交代で授業者と板書を分担し、両者を担当していない時間帯も有効に使い、評価方法で発表による加点を行う場合は、発言者をチェックしたり、また、グループで話し合いをするときのサポートをしたりと複数で授業を担当するメリットを生かした授業づくりができていた。

6 金曜 4 限の授業展開

6-1 5 章

担当者 9 名

評価方法

2 回の授業を 5 点ずつに分けて、授業参加態度と発言で評価する。また、グループごとの発表に対して、「生徒」の評価が一番いいグループに加点する。授業の最後に感想を書く。

第 1 回

「先生の立場から見た掃除の必要性」をテーマとして、グループ別に話し合い、代表者が発言し、その後個々人の発言に移り、議論する。さらに、グループ単位で賛成派・反対派に分けてディベートを行う。活発な発言が続く。

第 2 回

「いままで経験してきた特別活動を振り返って、その活動がどのような意味を持っていたかを考える」というテーマで、まず、意見交換、経験の交流の時間を持った。続いて学習指導要領に見る特別活動の位置づけや目標、特別活動の分野について説明し、「生徒」たちの経験を客観視する視点を与えた。

6-2 6 章

担当者 9 名

評価方法

2 回の授業を 5 点ずつに分ける。授業を受けて、その内容についての意見を各授業の最後に B6 用紙に書いて提出する。

第 1 回

まず、テキストに即して、教育制度の歴史と戦後の教育制度の転換を説明した。次に中高一貫教育の動向について、パワーポイントのスライドを使って説明した後、中高一貫教育を推進すべきかどうかについて議論をした。また、「生徒」は授業の最後にこの点についての自分の意見をまとめて用紙に書いて提出した。

第 2 回

まず、テキストに即して戦後の教育行政の展開と現在の課題について説明した。次に新しい時代の要請としての国際教育に焦点を当て、資料を提示しながら現状について説明した。「生徒」はこれまでの体験で学校・地域で国際理解教育として、どのような取り組みが行なわれていたかを紙に書き、発表すると共に、さらに国際教育を進めるにはどうしたらよいかというテーマで意見交換をした。

6-3 8 章

担当者 8 名

評価方法

第 2 回の最後に 10 点満点テストを行なう。テキストを読むとき、挙手で決める。読んだ人には 1 点加点する。

第 1 回

ソクラテスから始まる基本的な哲学・教育理論について紹介し、テキストに即しながら、その流れについて説明する。

第 2 回

文化教育学モデル・実存モデルに焦点を当てて、テキストに即しながら、自分たちが調べたことをまじえて、詳しく説明する。また、ボルノーの理論と「生徒」の体験を重ねて、これまでの経験をまずグループ内で話し、そのあと全体の中で話すという展開をした。授業担当者の経験も話した。最後に 9 問の小テストを行なっ

た。

6-4 7章

担当者 9名

評価方法

第1回、第2回それぞれ出席点を3点とし、授業への参加態度（発表など）を4点とする。

第1回

一斉教授法から始まり、助教法、セントルイス編成法、ドルトンプランなど、基本的な教授法の流れを、テキストに沿いながら説明し、日本の教授法の変化について、テキストの図をてがかりとして議論する。また、「私たちが教師になったらどのような授業をすればいいと思うか」というテーマで、意見を出し合う。これらを踏まえながら、オープンスクールの紹介をする。

第2回

学級経営と学校運営に関する基本タームを説明し、これらに関わる最近の動きについても報告する。学校と地域の望ましいありかたについて、「生徒」が自分の考えを書き提出する。

6-5 4章

担当者 10名

評価方法

第1回、第2回それぞれ出席点を3点とし、最後に提出する用紙の内容を4点満点で評価する。

第1回

「子どもが自ら学ぶ意欲のでる授業づくりはどうすればよいか」というテーマで行なわれた。まず、参加者が挙手してテキストを読み、次に、これまでの経験から、わかりやすかった授業、わかりにくかった授業について、グループごとに話し合い、各グループの例を全体の前で紹介した。さらに、個別学習、個別自由学習についてテキストを使いながら説明し、「一斉教授と個別学習のどちらがいいか、その理由も書きなさい。これからの日本の教育はどうなったらいい

と思うか書きなさい。」という問題を出し、「生徒」が自分の考えを書いて提出する。

第2回

一斉授業の特質と発問の分類、板書の仕方、授業を「自己変革の場」と捉える考え方についての説明があり、「生徒」が授業に対する感想を書いて終了した。

7 月曜5限クラス

7-1 5章

担当者 7名

評価方法

発言プラス提出物で決める。

第1回

テキストの掃除問題に関する具体例を読んでくることが課題になっており、この例を巡って、掃除に関する問題提起をし、「生徒」が賛成グループと反対グループに分かれて議論した。

第2回

子ども理解の方法・教育相談の方法・生徒指導の方法の分類と内容についてパワーポイントを用いて説明した。学校給食に関するテキストの例をきっかけとして、学校給食の意味について議論した。最後に学校給食についての「生徒」自身の考えを書いて提出した。

7-2 8章

担当者 8名

第1回

いじめ問題の現状について、基本的な説明があり、考察課題として事例が出され、いじめの解消のためにどのようにするかをグループで話し合い、発表した。授業担当者から、考察課題は中学校時代にあった実例であることが述べられ、学校の対応としてどのようなことが行なわれたかが語られた。

次に学校のルールに関する指導をテーマとして、授業担当者が先生と遅刻常習犯の生徒のやりとりを劇化してみせ、この生徒にどのような

指導をするかをグループで話し合っしてほしいと投げかけた。このアイデアにオーと声が上がる。グループで話し合った後、各グループからひとりずつ前に出て先生の役を演じた。もうひとつ、服装が乱れている生徒の指導場面も同様に行なわれた。この授業を企画した意図について、「ルールは必ず意味があつてつくられている」ということを理解してほしかったからだ」と述べて。参加者には突拍子もないことをさせたが、教師は瞬時に判断しないと生徒に通じない、伝わらないことが多いので、練習になると思つて企画したとのこと。「生徒」は授業の感想を書いて提出した。

第2回

不登校問題、学力低下の問題を扱った。「生徒」は今回の授業で考えたことと、不登校の原因についての考察を用紙に書いて提出した。

7-3 6章

担当者 10名

第1回

まず、学校の二期制、三期制について検討した。次に、日本の教育制度とドイツのそれを対比することで、日本の教育制度の特徴を捉えた。ドイツの教育制度について紹介し、参加者からの様々な質問に答えた後、両教育制度を比較して、それぞれのメリットとデメリットを「生徒」が発言していった。最後に、「生徒」は上記の点について自分の言葉でまとめたものを提出した。

第2回

授業担当者が用意したプリントにもとづいて、教育制度の課程主義・年齢主義の詳細な説明を行い、参加者はその資料の穴埋めをしながら理解していった。加えて、日本の義務教育の歴史を授業担当者が作成した年表に基づいて説明した。「生徒」は5問の○×問題を解き、全問正解で点数になるという方法で評価された。

7-4 7章

担当者 7名

評価方法

小テストで決める。ただし、居眠りは0点。

第1回

まず、一斉教授の始まりと助教法について、図や絵を板書して分かりやすく説明し、現在の学級規模についてデータをもとにして話した。次に、オープンスクール・無学年制・チームティーチングについて説明し、チームティーチングのメリットについて話し合い、学級運営、学校経営について分かりやすく説明した。パワーポイントのスライド作りがとても工夫されていた。授業担当者の中学校時代の学校・先生を例にあげながらわかりやすい説明であった。授業内容から10問の小テストが行なわれた。

第2回

学校五日制について、テキストを予習してきた前提で、ディスカッションを行い、賛成・反対の意見を出し合った。次に自分が教師になった時、どのようなクラス作りをしていくのか、「生徒」が意見を出し、それについて授業担当者がさらに詳しく尋ねた。前回のテストについてコメントがあった。

7-5 4章

担当者 10名

評価方法

授業参加状況と小テストで決める。

第1回

好奇心と向上心について、授業担当者が作成した資料の穴埋めを進める形で説明し、具体例を挙げてどのような指導が好奇心を失わせない指導かについて意見を出す。次に詰め込み教育について歴史的な展開を説明し、その問題点と現在の取り組みについて紹介する。わかる喜びを感じた経験について、各グループで話し、代表者が発表する。

第2回

一斉教授、助教法、個別学習についてその開

発に携わった人々の人生を辿る形で、なぜその時代にその学習法が必要とされたのかが分かるような形で説明された。次に現在の制度的な新しい流れとして単位制高校の増加データが示され、「生徒」の体験を交えて、一般高校と何が違うのか、メリットとデメリットについて、意見を交わした。最後に今回の内容に関して小テストを行なった。

他のグループと内容的に重なる部分があるが、授業方法や学習方法が生み出された当時の時代性に着目するという独特な切り口で授業が構成されており、「生徒」から高い評価を得た。

8 火曜 2 限クラス

8-1 4 章

担当者 7名

評価方法

第2回の授業を終えて行なう小テストで評価する。

第1回

授業はテキストの内容をコンパクトにまとめ、ポイントを整理し、授業担当者が調べた内容を付け加えて作成したプリントを中心に授業を行なった。

第2回

授業は前回と同様の方法で行なった後、話し合いを取り入れた。「一斉授業を変えるべきかどうか」というテーマで、グループごとに話し合った後、グループの代表者が発表した。この後、小テストを行なった。

8-2 7 章

担当者 6名

評価方法

2回の授業を終えて、記述による小テストを行い、その点数によって評価した。

第1回

パワーポイントのスライドにある4つのことわざを完成させることから始まり、これを教室

の掲示の例として挙げ、学級運営の具体的な話につなげた。次に、テキストの内容を踏まえながら、自分たちで調べた内容も加えた。一例として「クラス編成の基準」は、初めて知った「生徒」も多かった。その後、学級担任制と教科担任制のメリット、デメリットについてグループで意見交換する時間をとってから、全体の前で発表した。

第2回

学校経営について作成したプリントをもとに、授業が進められ、空欄について質問しながら、「生徒」はテキストと照らし合わせて答えた。学校運営協議会、学校五日制という最近の動きについて説明した後、記述2問の小テストを行なった。

8-3 6 章

担当者 6名

評価方法

2回の授業が終わってから、資料参照可の記述式小テストを行い、評価を決める。

第1回

授業担当者が作成したプリントを用いて、「生徒」は強く印象に残っている教科書をプリントに書き込んだ。また、枠の中に教科書選択のシステムを整理できるようになっており、教科書行政の説明が行なわれた。課程主義、年齢主義という義務教育制度の分類も、日本の義務教育規定の変遷についての説明も、自作プリントにしたが行なわれた。

第2回

前回の内容にもとづく小テストが行なわれ、次に教育制度の変遷と、日本の教育の国際化への対応をテーマとして自作プリントにしたがって、穴埋めをしながら学習を進めていった。

現在の教育改革の進行状況を整理して説明したうえで、「生徒」がプリントの枠の中に、これからの教育について、「どのような教育をしたいのか、どのような教育制度であってほしいのか」を記述した。

8-4 8章

担当者 6名

評価方法

特に最初に評価方法は知らせないで、問題を解いた用紙や意見を書いた用紙を回収する。それで、授業に取り組む態度をみて、評価する。

第1回

ソクラテスについてのかかなり詳しい話と「無知の知」についての説明が行なわれた。教育の4モデルについても分かりやすくコンパクトにまとめられたプリントが用意され、これにしたがって説明が進められた。

第2回

テキストを使用せず、テキストの趣旨を生かして「生命の授業」「先生主導か、生徒主導か」をテーマとした話し合いが行なわれた。

「学力低下問題」では実際に大学生の学力低下の実例として挙げられている問題を「生徒」が解いてみたらうで、データとして解ける人・解けない人のパーセンテージを提示して、この傾向の原因について考える授業だった。

8-5 5章

担当者 8名

評価方法

授業後の感想文によって決まる。

第1回

掃除を巡っていくつかの論点を挙げ、グループの意見を出す、また、個人の意見を出すという授業だった。

第2回

給食の意味と役割というテーマで、4つのメニューの写真を黒板に張り、メニュー内容も板書して、年代の古い順番に並べるといった問題から出発した。メニューの歴史について説明したあと、給食の残飯量がどれくらいかを問うた。さらに、それが給食に使用する食材の何パーセントに当たるかを問うた。授業担当者から給食に対する意識を自分の子どもにも伝えてほしいとのメッセージがあった。

次に、給食が出来上がるまでの過程がパワーポイントで説明された。

さらに給食のご当地メニューに関して参加者のこれまでの経験を尋ねた。授業者も全国のデータを調べた上で、この問いかけをしており、各グループから出てくる珍しいメニューに対して、「生徒」に分かるように説明を加えていた。

最後に、現代の食生活のなかでの学校給食の意味について話し合った。この内容を受けて、孤食の問題、食生活の偏り、朝食抜きなどが子どもの健康に大きな影響を与えていること、そのなかで学校給食が改めて重要視されていることを説明して、まとめとした。

9 平常点(4章分)の報告

平常点50点のうち、40点分(4章分)の合計点は、最後の授業で報告することができる。報告することで学生の分担分の合計の確認ができるということと、定期試験に対する心構えもできる。

平常点各章の素点を伝えると、最後のグループの採点に影響する可能性があるため、合計点のみを伝えた。報告方法としては、一人ひとりの短冊を作り、学科・氏名の右端の欄に合計点を書き入れたものを渡した。第3回の授業で渡した一覧表の空欄に成績を書き入れ、ひとりずつ切り離してつくった。それをグループごとにわけ、名前が分かるように短く切った封筒に入れ、グループごとに渡した封筒の自分の名前の短冊を引くと成績がわかるというものをつくって渡した。

10 定期試験

定期試験をどのような形式で行うか。記述式か、穴埋めか、〇×か、これらの混合か。この点についても、各クラスで12月上旬に提起した結果、共通して〇×方式となった。

どのクラスも授業で取り扱った内容を試験範囲とする約束をしていたので、また、3 クラス別々に定期試験を実施するので、それぞれのクラスに即した問題を50問ずつ作成した。解答に際して、〇は20~30個の範囲であること、20未満、31以上は採点の対象としないことを各クラスの試験会場で確認した。

欠席者の人数はわずかで、ほとんどが一度も欠席することなく後期の授業を終えた。筆者もいっしょに授業を受けながら、学生自身を楽しんでいるということが伝わってきた。授業後の感想からも、彼らにとって自分の存在感を感じ取れる授業になっていたことがわかり、授業運営者として嬉しく思う。

終わりに

初めての試みであったが、学生は授業の趣旨と自分たちが行なうべきことをよく理解してくれた。いろいろとオリジナルな工夫をして授業をつくり、授業担当者も「生徒」役の学生も楽しめるような心遣いが随所に見られ、アイデアの豊かさを改めて感じた。

授業の準備はグループのメンバーの空き時間、昼休み、「教育原論Ⅱ」の授業後の時間等を使って、話し合い、準備を進めていた。テキストを指定していたので基本的なベースがあったのは確かだが、自分たちで調べ、分からないことは教員にも尋ね、図書室やインターネットをよく使い、情報のまとめ方もよく工夫されていた。

授業中は、板書、プリント、教材提示器、パワーポイントを使用した。パワーポイントも背景やアニメーションを取り入れ、見やすく美しいスライドをつくり上げていた。難なく行っていたように見えたが、授業後に聞いて、何度も試行錯誤を繰り返した成果だとわかった。

授業では話し合いや発表の場面が多く設定されていたが、これらは活発に活用されていた。一旦グループで話して、それを発表する、あるいは、その後個人の意見を発表するという方法が「生徒」に気楽さをもたらしたのかもしれないが、非常に活発に発言していた。

最初にルールの詳細をきちんと伝え、彼らが動けるような段取りをしておく、こんなに自主的に学習ができるのかと驚いた。